

# お世話をしよう

発芽したあとも、日々のお世話や観察を繰り返し、自分のあさがおに親しみや愛着を深めていきたいものです。さらに、自分で考えて自分でやってみることを大切に活動をちょっと工夫することで、自ら学ぶ力の基礎を養うことができます。

子どもの活動のよさや気づきを価値付けたり、全体に広めたりしていくことで、楽しく、意欲的に栽培活動が続け、着実に子どもの力を付けていきます。

ここが  
ポイント

**「観察カード」は週に1回！**

あさがおの栽培活動は長く続きます。お世話の時間を確保する一方で、観察してカードを書く「あさがおタイム」は週に1回にします。定期的なことで、観察カードを書くことを楽しみにするようになり、「次はこれを書こう」と成長や変化に着目し、見通しをもちながらお世話をするようになります。

ここが  
ポイント

**「観察カード」に、あさがおからの  
返事の手紙が来る「あさがお郵便」！**

週に1回の「あさがおタイム」のカードのよさを具体的に uptake、「あさがおからのお手紙」として毎時間届けます。みんなの前で教師が読みきかせることで、紹介された子は嬉しくてやる気がでますし、聴いていた子は「私のあさがおはどうか」「カードにこんなことを書くといいんだな」と新たな意欲につながります。



## 《「あさがお郵便」の実践》

子どもがかいた「観察カード」に、あさがおから次のような手紙で返事が届きます。

1ねん1くみのみなさんへ

こんにちは、あさがおちゃんです。

いつも、やさしくお世話してくれてありがとう。おかげでげんきにめをだすことができました。〇〇くん、おみずをあげすぎないように土をさわってからあげてくれてありがとう。〇〇ちゃんは、「だいすきだよ、ちゃんとお世話するよ」っておてがみをくれました。うれしいなあ。〇〇くんは、おひさまがあたるようにかんがえて…。

情意的な気付きを  
価値付ける  
「あさがおちゃん」

心をこめてお世話をしたり、優しい言葉掛けをしたりする情意的な気付きを評価・価値付けるあさがおちゃんからの返事

1ねん1くみのこどもたちへ

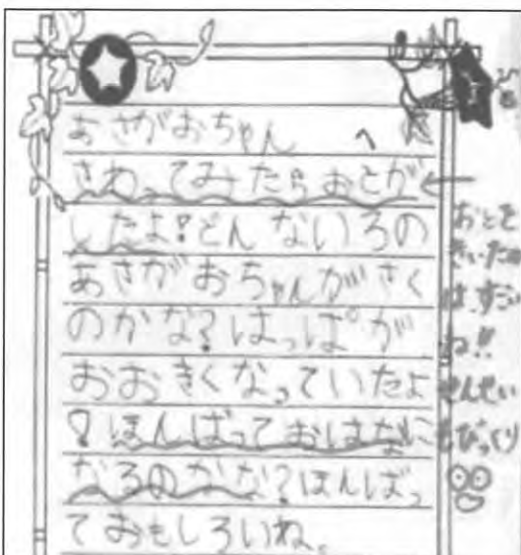
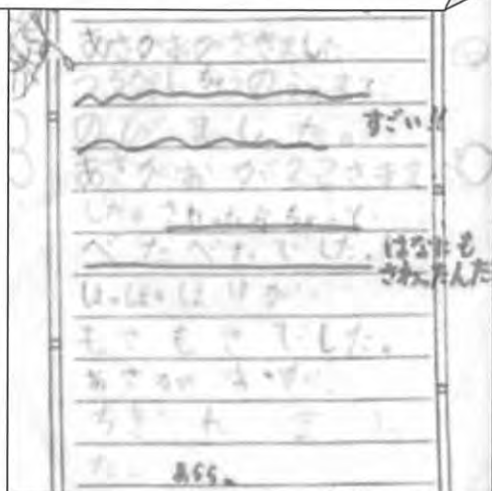
よお、あさがおブラックだぜ。

□□くんは、あさがおのめをきいろくぬっていたな。それに「ちょうちょみたい」ってかいてあったぞ。よくみているなあ、さすがだ！□□ちゃんははっぱにさわってみて「ふたばはつるつるしているのに、ほんばはふわふわしている」ことにきがついたのか。さわってみるなんてすごい…。

よく見たり、触ったり、においをかいだり…  
観察における知的な気付きを評価するあさがおブラックからの返事

知的な気付きを  
価値付ける  
「あさがおブラック」

はなにもさわってみたのか。  
「ちょっとべたべた」していて「ちぎれた」のか。はなにもさわってみるなんて、くうう、やるなあ。



「しゃりしゃり」「ちくちく」「もこもこ」「ざらざら」と！さわってかんじたことをなんてじょうずにかくんだ。しかも、さわってみたら、おとがしたと！おとをきくなんてすごすぎるぞ。

## あさがおブラックからの返事

くきがながくなったことにきがついたのは〇〇だな。  
でも、はかつてはいないだろう。

「あさがお郵便」で、子どものカードを紹介します。そうすることで、次のような効果が見られます。

- ◎ 次のカードへの意欲を高める。
- ◎ 次のカードの表現を豊かにする。
- ◎ 次のカードに新たな視点を広げたり高めたりする。

「あさがおちゃん」は子どもの情的な気付きを価値付け、「あさがおブラック」は知的な気付きを価値付けています。あさがおの観察の時間、観察する前にこの手紙を紹介することで、子どもの観察の仕方やカードの書き方がぐっと変わってきます。「観察カード」に先生が朱書きを入れても子どもはあまり読まないし、読めません。よさを学級全体に読んで聞かせて、子ども自身が気付けるようにします。名前を呼ばれて紹介された子どもは大喜びです。また、紹介されなかった子どもも、「次は紹介してほしいな」とやる気が出ます。数回の「あさがおタイム」の間に、どの子も一度は名前が紹介されるように配慮します。

### あるある NG!

あさがおの芽が出てもしばらくは教室に置いておきます。日々の成長を間近で見るためにも大切です。そして、少し大きくなってきて、そろそろ外に出したい、間引きもさせたい、という時期が来た時に、先生が



「さあ、外に出しますよ。なぜかというよね。」「間引きということもしなくてはだめなんだよ…」というように、つつい教えてしまいがちです。しかし、本当は子どもに「なぜ外に出すのか」「なぜ間引きするのか」ということを考えさせたいところです。

ここで、あさがお郵便の要領であさがおから数枚の絵が届きます。あさがお郵便は、観察カードを評価するだけでなく、鉢を外へ出したり支柱を立てたりするような活動の要所でも、活用することができます。





「こんな絵が一緒に届いたんだけど…」と子どもに投げかけます。子どもは、「なんか怒ってるよ」「泣いているのもある」「きゅうくそうだよ」「せまいんじゃない？」などと、次々に考えていきます。「一つの鉢に、ちょうどいい数がありそうだね」と結論付けます



「この絵は何だろう？」と投げかけます。「くたつとしてる」「いやな気持ちの顔してる」「暗いんじゃない？」「窓よりこっち側にあるから教室の中だよ」などと子どもは元気のないあさがおの様子に気付いていきます。



「では、こっちの絵は？」と比べます。「うれしそう」「楽しそう」「元気！」「お日様！」「あったかいんだよ」「ぽかぽかがすきって言ってたね」というように、暖かくて嬉しそうなあさがおの様子に気付いていきます。

こうして、「外の方がぽかぽかしていて気持ちよさそうだね。外に出してあげたほうがよさそうだね。」と、子どもたちは話し合っただけで納得します。子ども自ら「あさがおを外に出してあげたい」という思いや願いを引き出すようにすることが大切です。



間引きや外に出すことを、先生が単に教えるのではなく、1年生なりに自分で考え、自分で決めるということを大切にします。そうすることでその子なりに考えをもち、こだわり

りをもって、日当たりの良い場所を探しさがす子どもも出てきます

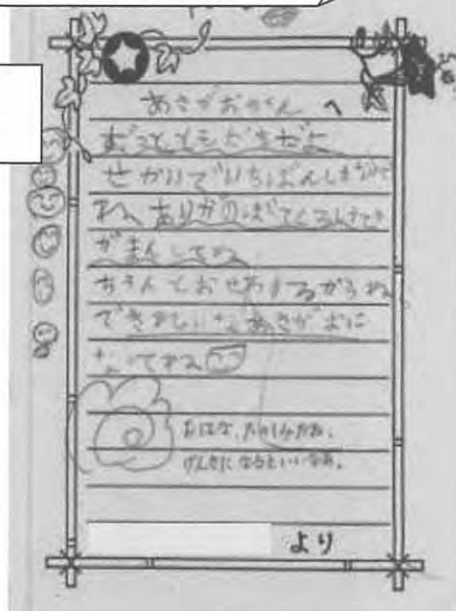
### あるある NG! ～支柱を立てる～

あさがおセットに入ってくる支柱。どうして必要なのでしょう。子どもにとっては必要がないのに時期が来たからと教師がとりあえず配っていないでしょうか。つるが伸びてきて上に伸びないか心配になったり、友達のつると絡まって困ったり…。子ども一人一人が「必要!」と思った時に立てたらよいのです。「先生、棒はありませんか?」と言われたら渡してあげることです。絡まったつるは一緒に丁寧にほどいてあげるとよいです。

ここが  
ポイント

### ピンチをチャンスに!

あさがおの元気がなくて、枯れそうな状況です。「ずっと友達だよ。世界で一番。死なないでね。」切実な感じがします。ピンチではあるのだけれど、あさがおに寄り添って、気持ちを育てるチャンスでもあるのです。あさがおに「元気になって」と、書きたくてたまらない状況になったときがチャンスです。





ここが  
ポイント

「観察カード」を工夫する！

最初は、みんなで同じカードを使って書き方に慣れさせていきます。慣れてきたら、段階を追って種類を増やしていきます。「手で触った様子を書いている子がいたよ。」「感じたことが書けるこんなカードはどうか。」というように子どもと相談しながら、思いや願い合わせて表現できるようにしていくと、子どもの意欲も高まります。大切なのは子どもの願いと寄り添っていること。

子どもの書いたカードをよく見て、思いを表現するのに必要なカードを、「このカードを使ってみたい！」と思えるタイミングで増やしていくことが大切です。

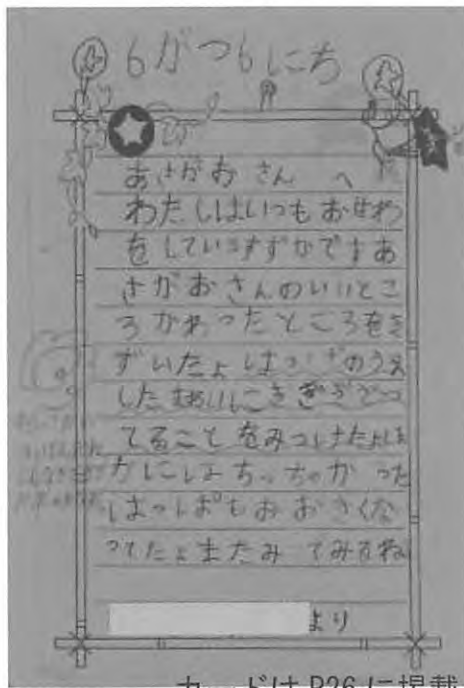
「はかせ」

あさがおの細かい部分までよく見て書くことができます。観察の目が育ちます。

「ゆうびん屋さん」

自分のあさがおへの思いをお手紙に綴ります。親しみの気持ちを生き生きとできます。

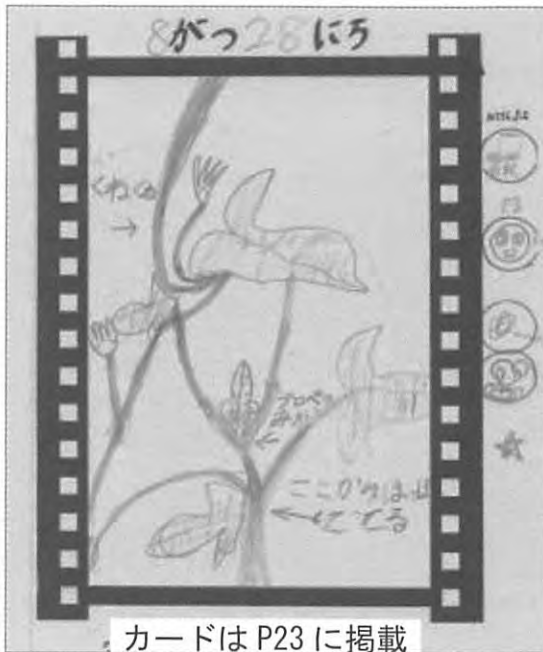
P12 のカードを活用



カードは P26 に掲載

「カメラマン」

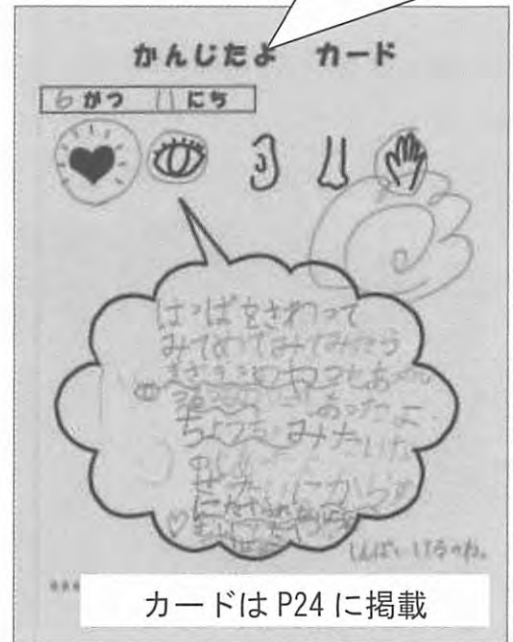
あさがおが少し大きくなってきたら、全体を写真のようにことのできるカードも用意します。



カードは P23 に掲載

「しんぶんきしゃ」

みて、さわって、音を聞いて、においをかいで…諸感覚をフル稼働させて感じたことを書きます。



カードは P24 に掲載



カードは P25 に掲載

「ミクロマン」

自分が小さなこびとになって、葉の裏やお花の中に入って部分をズームして書きます。

観察する時に、子どもは「今日は博士になろうかな、郵便屋さんになろうかな」などと考え、自分で決めて書くようにします。「今日は何になってカードを書こうかな」と考えることが「ここを見よう」「こんなふうにかきたい」という思いや願いの表れであり、観察の視点をもつことにもなります。



数種類のカードから自分が使いたいカードを選びます。なかなかカードを選べない子どもには、先生が寄り添って一緒に考えてあげることも必要です。カードを選んだら、どのカードを選んだか分かるように黒板などにネームカードを貼ります。先生はそれを見ることで、誰がどんなことを書こうとしているのかを見取ることができます。



観察の時間ではありますが、もちろん観察するだけではなく、背丈を測ったり、土の湿り具合を確かめたりするなど、活動する子どもも認めてあげます。

ここが  
ポイント

あさがおタイムで観察、カードを書くことに慣れてくると、書き終える時間に差が生まれてきます。そこで書き終わった子から、一対一の交流タイムとします。1年生は、「聞いてほしい」「見てほしい」という気持ちでいっぱいです。友達にカードを「読んであげる」「見せてあげる」ことから交流をスタートします。カードの交流後は「がんばったね」とお互いにカードのはじめに「にっこ

じに「にっこりマーク」を書いてあげるのはどうでしょう。子ども同士の交流は、普段自分では気が付かない視点に気付き、子どもの気付きを広げ、お友達から価値付けてもらう場になります。「友達のあさがおと比較する」「友達のがんばりを認める・認めてもらう」ことから「人に伝えるのって楽しいな」「もっといろんなことを知りたいな」という気持ちを育てていくことへもつながります。

学習が進んでいくとさらに、実際にあさがおを見ながら説明したり、相談したりする小交流へと発展していきます。



### Active

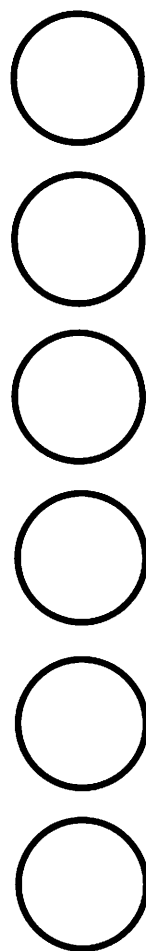
カードに「見てもらったよ」というマークをつけられるようにしておきます。このことで、子ども同士の交流を促すことができます。



### Active

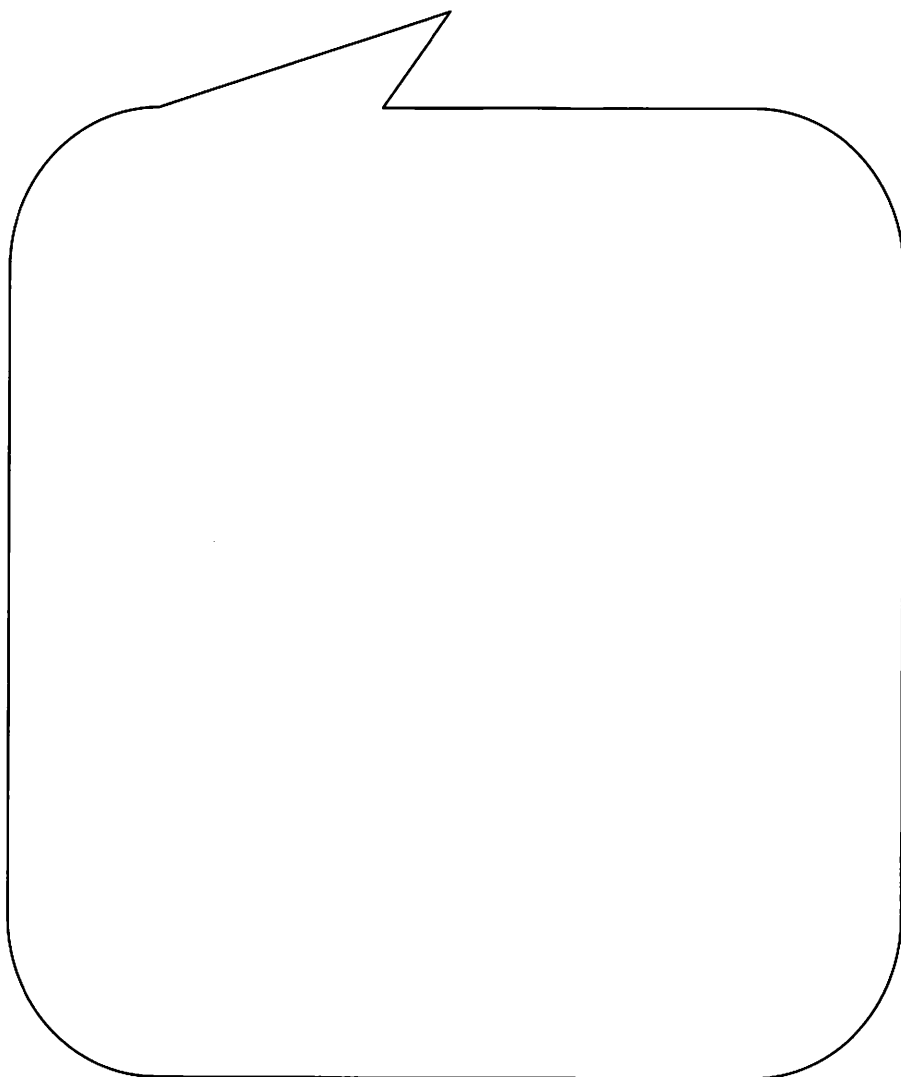
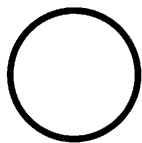
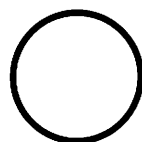
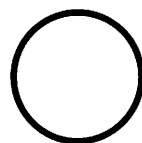
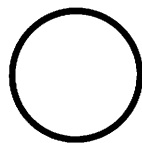
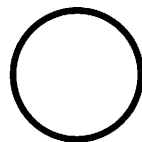
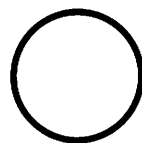
交流を始めるきっかけは、カードを書き終えた子どもが、「先生、できたよ！見て！」と見せに来て、いつしかそこに行列ができてしまったときにします。「ごめん！先生一人じゃみんなの見れないよお。先生のかわりにお友達のを見てあげることでできるかなあ？」というように始めてみてはどうでしょう。

月 日



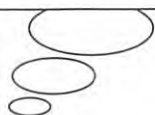
なまえ

\_\_\_\_月\_\_\_\_日



なまえ

\_\_\_\_月 \_\_\_\_日



なまえ



月 日



より